

■酒の池

花枝は思はぬ中澤の助言によつて、兄の心を和らげる事が能たので、彼女の満足は此上も無い。

かたみ

昨晩から降り出した雨も、午少し過ぎた頃から止んで、往來も早き雲の切れ目から、美しくしき日が耀き出で、玉の如き露を含んだ青葉にキラリと光る。
表二階の四畳半の間で、秀治の着物を仕立てる清子は、今しも針を運ぶ手を休め發と一息吐いたが、何思つたか衝と立上り鏡臺の引出しから一葉の寫眞を取出した。それは桐野友衛の六年前の寫眞である。

彼女は友衛が居なくなつてから六年後の今日に至るまで、自分の淋しい心を此一

枚の寫眞に依つて慰めてゐたのである。清子は、昔も今も變りのない、男らしい友衛の寫眞顔を打目茂りつゝ、發と長い溜息を吐く折しも、軽い足音が階段に響いたので、彼女は慌て、寫眞を帯の間へはさみ、上り口の方を見返る途端、制服姿の秀治は勢良くはいつてきた。

『只今！』

『今日はずいぶん早いねえ。』

『え！』と、秀治は目を圓くして『何時もと同じ時間ですよ。』

『嘘ばかり……。』と、清子は頭から嘘にして丁つた。

『今何時だと思つてゐるんです。もう三時ですよ。』と、秀治は着物と着替へて姉の傍へドツカリ坐る。

『もう那樣になつて……。？』と、今度は清子が目を睜つた。

『成りますとも。』と、秀治は姉の帯の間から少し出でゐる寫眞を見つけて『姉さ

ん。貴女のやうに然う寫眞ばかり見てクヨクヨしてゐたのでは、了ひに病氣に成つて了ひますよ。」

「病氣に成つても構やしないわ。」と、清子は淋しく笑つて「だけど、大丈夫。病氣になどなりつこは無いから。」

「姉さん。然う頭からお茶にされては困るなあ。」

「お茶になぞしやしないわ。」

「姉さん。」

「何有？」と、帯の間から寫眞を抜きとる。

「僕。姉さんにお願ひが有るんです。」

「甚麽事なの？」

「聞いてくれますか。」

「それは姉弟だもの。甚麽事でも聞いて上げるわ。」

「姉さん。貴女も辛いでせうけれど、桐野の兄さんを諦めて下さいな。」

清子は知らず識らず俯むいた。而して力の無い沈んだ聲で、

「秀ちゃん。お前の願ひはそれなの？」

「然うです。」と、秀治は清子の顔を眺めと見目茂りつ、「聞いてくれますか。」

「秀ちゃん。其事なら妾は疾から諦めてゐるわ。」と、清子は始めて此時寫眞の上
に涙を落した。

「僕だつて斯様事は云ひたく無いのです。出来る事なら桐野の兄さんと姉さんと
を一緒にして上げたいのですが、僕のやうな者がいくら心配したつて……。」

「あ、秀ちゃん。」と、清子は悲しさうな聲で云つて「其事はもう云はないでお
くれ。」

「けれど姉さん。辛いでせう。」

「それは辛いわ。」と、清子は袖で目を押へ「辛ければ妾は辛棒してゐるのよ。」

もともと、友衛さんと妾の仲は阿母さんがしてくれて、又、二人の仲を裂いたのも阿母さんなの……友衛さんがまだ家に居た頃。阿母さんが餘り小言を云つたものだから、友衛さんは妾の入智恵だと思つたのでせう。それから妾を嫌いだしたのよ。』

『……』秀治は思はず涙ぐんだ。

『妾がいくら友衛さんを思つたところでそれは何にもならないのだから、諦めるより他には詮方が無いのだものねえ。』

『姉さん。僕、桐野の兄さんに云ひたい事が澤山あるのだけれど……。』

『え？』と、清子は驚いて顔を揚げ『秀ちゃん。そればかりは云はないでくれ妾、お願ひだから。』

『あ、』と、秀治は涙を拭つて『これ程姉さんが思つてゐるのに、桐野の兄さんにはこれが分らないのかなあ。』

清子は堪りかねて寫眞をか、へたまゝ、其邊へ衝と泣伏した。

彼女は今まで、秀治が學校から歸つてくるのを待つて、自分の心を打ち明け、而して斯くの如く泣いてゐるのが、今の彼女に取つては何より楽しみな事であつたのだ。

『秀ちゃん。それだけは思ひ止まつておくれ。友衛さんが家に居た時によく云つてゐたわ。縁の下の舞かや庭に飛ぶ胡蝶……つて。その時は其意味が分らなくて度々友衛さんに聞いたのだけれど、今に成つて見ればつくづく自分の身に思ひ合せられるわ。いくら此方で思つてゐても、人はそれ程には思はないものよ。』

『それが分つてゐたら心配は無いのだけれど……。』

秀治は慌て、目を摩つて、
『僕、此間桐野の兄さんに姉さんの心を良く云つたら、桐野の兄さんも涙を流して聞いてくれましたよ。だけど、桐野の兄さんは、もう一生女は傍へ近附けない

■かたみ
と云つてました。』

三百九十

『それは口先ばかりよ。いつか市ヶ谷の八幡様で逢つたでう。あの何とか云ふ女あの人か友衛さんの奥様になるのよ。屹度なると妾は思ふの……』と、清子は小さき胸を抱き締めて、激しく身体を顫はせながら『どうせ……どうせ妾のやうな者がいくら思つたつて、友衛さんと一緒になる事は能ないのだから……妾は……妾は潔よく……あの女の人に譲つて了うつもりで……あの石……石黒と一緒に成る事にして了つたのよ。いくらお金は持つてゐても、あんな石黒のやうな人の處へは……妾だつて行きたく無いわ。』

秀治は發と長い溜息を吐いた。而して姉の肩に手を掛けつゝ、顔を覗き込むやうにして何か云はうとした時、清子は咽返へる胸を押へて、

『秀ちゃん。妾はもう……死……死んで了ひたい。』

『姉さん。』と、秀治は驚いて『貴女は何を云ふんです……。』

『いゝえ。』と、清子は髪の潰れる程頭を振つて『妾はこのまゝ……此寫眞を持つたまゝ……死んで……了いたいわ。』

『姉さん。那樣情無い事を云はずに……石黒へ行くのが可厭なら、いくらでも行かない方法があるでは有りませんか。』

『でもねえ。妾が石黒へ行くと覺悟したのは皆友衛さんの爲を思つてした事なのよ。だから秀ちゃん止めないでおくれ。妾は死んだ氣になつて石黒へ此冷たい

……友衛さんに對するやうな戀も愛もない身体を送る心意であるの。』

『姉さん。』と、臍を絞るやうな聲で云つた秀治は、耐えかねて姉の手をシツカリ握り、

『姉さんを斯うして生きながら葬つて了うのは、誰の罪でも無い、皆桐野の兄さんの罪なんだ……。』

『秀ちゃん。お前は何を云ふの？ 妾を斯う云ふやうにしたのは友衛さんの罪ぢ

や無いのよ。阿母さんを悪く云ふやうで濟まないけれど、妾を石黒へやらうと云ひ出した阿母さんの罪なんだわ。』

『……………』

秀治は物も得云はず、只姉の手を取つて熱い涙にくれた。

清子は偶と顔を揚げ、涙の満た目を瞬きつゝ、友衛の寫眞を睨と見目茂り、

『秀ちゃん。是が友衛さんのかたみに成つて了つたのねえ。』

『姉さん。もう其寫眞は見ない方が可いですよ。了ひには身体を悪くしますよ。』
と、秀治は心配さうに姉の顔を覗き込む。

『い、え。可いの。妾は是を見てゐるのが何より楽しいのだから構はないでおいておくれ。却つて身体が悪くなつて死んで了つた方が、苦勞も心配も、悲しみも無くて餘程可いと思ふわ。』

清子は寫眞を持つた手を力なく膝の上に投出して云つた。

『姉さん。それは自棄と云ふものですよ。此世の中に生きてゐて、苦勞もし、心配もするのが又樂しみの一つと成るのではありませんか。』

『妾には其樂しみが無いのよ。』と、清子は淋しい笑を浮かべながら、力の抜けた聲で云つて再び俯むいて了つた。

『何故です。』

『妾は死んだと同じ身體だもの。』

『姉さん。貴女は一人で然う諦らめてゐたつて詰らないぢやありませんか。だから、石黒が可厭なら可厭でいくらも……………』

『其方法と云ふのは甚麽事？』

『然う聞かれると一寸困りますが、貴女が飽まで可厭だと云へば可いぢやありませんか。』

秀治は低い聲ながら力の籠つた聲で云つて姉の顔を覗き込んだ。

『でも、妾は承知して了つたんだもの、今更可厭だと云ふ譯にはゆかないわ。』と清子は困つた顔をする。

姉が大分乗氣になつて來たやうすを見て秀治は、心の中に喜びながら、
『其處ですよ。』

『何處なの？』

『又……』と、秀治は苦笑ひして『秘密な事ですよ。』

清子は急に耳を濟ませたが、誰も聞いてゐないのを確めた上、

『甚麼事なの？』と、膝を進めます。

秀治は、赤くはれ上つた姉の顔を見て、俄かに胸が一杯になつたので、頓には何とも云ひ得ず俯むいてゐたが、思ひ直して膝を進めた。

同 情

『叔母さん。少時御無沙汰致しました。』

家で弟の秀治と万事の相談を遂げて、今しも友衛の家へ駈つけ、折しも在宅であつた直子と、長火鉢を差はさんで坐つた清子は、先づ一樣の挨拶をしたのである。

『妾も行こう〜と思つてゐただけけれど、つひ暇が無いものだから……。』

と、直子は長い銀の煙管に煙草をつめて、徐かに火鉢の中へ差出した。

『叔父さんも友衛さんも今日は……？』

『あゝ。』と、直子はフツツと煙を吐いて『友衛もあの年をして勤になど出なくて
も可いと云ふのだけれど、遊んでゐるのが嫌ひな人なんだからねえ。』

『ですけれど、お二人とも良くお働きなさいませねえ。』

それには答へず直子は、火鉢の縁で煙管を叩きながら、

『清。お前も今度可い處へ片づくさうだね。』

『叔母さん。』と、清子は急に悲しい顔をして『妾。その事で叔母さんに折入つてお願ひが有るんです。』

『え？』と、直子は目を睨る。

『叔母さん。妾、石黒へ行くのが可厭なのでですから、叔母さんのお力で石黒の方へ行かないやうにして戴きたいのですが……如何でございませう。』

『それでも向方はすいぶんお金持だと云ふ事ぢや無いか。』

『叔母さん。』と、清子は悲しい聲で云つて『お金を持つてゐるのが何でせう。お金を澤山持つてゐる人の處へ行けば、必ずしも一生楽しく送られませうか。』

『それは怎うしてもお金を澤山持つてゐるとねえ……。』と、直子は語尾を濁す。

『叔母さん。妾は叔母さんのお考へとは違つてゐます。いくらお金を澤山持つてゐる人でも、氣が合はなかつたら一生泣いて暮さなければならぬ事に成るだらうと思ひますし、また其反對にいくら、貧しい人でも氣が合つてゐたら、甚麽苦勞をしても楽しく暮して行けるだらうと思ひますわ。』

『では、お前は石黒と云ふ人と……。』

『え、妾は始からあの石黒は可厭だつたのです。』

『……………』

直子は物も得云はず清子の顔を見目茂りつゝ、發と長い溜息を吐いた。

花枝と云ひ、清子と云ひ……斯くまでに金持ちを罵るところを見ると、何か石黒に對して二人とも不快な事が有るに違ひない。と思ひ出せば、未だ逢つた事は無

い——其石黒なる者の正體が今度は茫として取りとめも無く成つてくる。けれど、二人が斯くまでに石黒を可厭がるるところを見ると確かに尋者でない云ふ事が

分る。尋者で無いとすれば何か。直子は其事を考へるより疾く、清子に對して能得る限りの援助を與へてやらなければならぬのだと思つた。

『それほど可厭な處なら何故お前は……？』

『叔母さん。これは阿母さんが無理に押つけたのです。』

『たとへ無理に押つけたにしろ、お前が飽まで可厭だと云へばこれは纏りつこの無いのです。他の事なら左に右、こればかりは親の云ふ事に反對しても不孝とは云ひませんよ。斯う云ふ事は自分の一生を定めて了はなければならぬのだからね。いくら親の云ふ事でもその末々の事が分つてゐながら、怎うしても親の云つた處へ行かなければならないものとは定まつてはゐないのですよ。其点はお前の落度だつたのです。それに噂を聞けば、お前と石黒と云ふ人とは疾から知つてゐる間柄なので、別に見合と云ふものもせず、而して毎日のやうに往來をしてゐると云ふ事だが、それがお前に取つては尙悪いのです。』

『……。』清子は答へなかつた。彼女は俯むいたまゝ、一々直子の云ふ事を聞いてゐたが、總て自分の身に思ひ當る事のみなので、猶も叔母の云ふ事を一言洩さじと聞いてゐるのである。

『妾は或る人から石黒と云ふ人の平常の行を良く聞いて知つてゐます。其人の處へお前が行くと云ふ噂が有つたので、妾も相當に氣を揉んだのですよ。けれど、お前の阿母さんが信じてゐる人の處へ自分の娘をやるのに、何も妾がそれに就て故障がましい事を云はなくても可いだらうと今まで差控へてゐたんですが、お前が折角然う云つて來たのだから、妾も何とか云つて見ますけれど、これから後は何事によらず輕々しくしてはなりませんよ。可いかい？ それだけは此叔母が良く斷つておくよ。』

直子はつひに清子が歎願したのを容れたのである。直子は自分の姪をして斯ゝる素性の怪しい石黒如きもの、處へやるに忍びなかつたのだ。

「えい。」と、清子は嬉しさに「これから氣を注げますから、どうかお願ひ致します。」

「で、お前は此先怎うする心意なんだへ。」

「此先……？」と、自ら其一言を反覆した清子は、急にうら淋しい顔をして「妾……此先は一人で暮らして行く心意です。甚麼事をしたつて妾一人位なら……食べ行かれない事も無いでせうから。」

直子は宛も驚いたやうな顔をして清子を見つめたが、清子の顔には一種冒し難い強い諦めの色が耀いてゐた。

「それでも女と云ふものはねえ。一生一人でやつて行くと云ふ事は到底出来ない事なのだよ……。」

「叔母さん。妾はやつて行く心意ですの。」

と、清子は帯の間から友衛の寫眞を出して、

「叔母さん。是を御覽下さい。」
直子は清子が差出す寫眞を受取り、清子の顔と寫眞の顔とを等分に見比較べてゐたが、

「是は友衛の寫眞ぢやないか。」

「えい。」と清子は力無く「叔母さん。妾は其寫眞を六年の間一日も身体から離れた事はございません。」

直子は再び目を睜つた。

「叔母さん。他の方が友衛さんを思つて被在る心も、妾が友衛さんを思つてゐる心も衆同じ事です。」

「清！」と、直子は感極まつた聲で「お前はそれほど友衛の事を思つてゐてくれるのですか。」

「えい。」と、清子は俯むいて「ですけれど、友衛さんは妾を嫌つて被在るのです。」

から、いくら妾のやうな者が……。』

『清！ お前の今の心が六年前に持つてゐたら、妾は何をおいても二人を一緒にしてやつただけけれど、今となつては氣の毒だけれどそれは能ない。譯を云へば却てお前を苦しませなければならぬから、妾はもう何も云はない。清！ お前も無い縁と諦めて友衛の事は忘れておくれ。』

『叔母さん。』と、清子は血の氣のない青い顔を擡げ『妾、到底忘れると云ふ事はできませんけれど、其寫眞を戴いて妾は友衛さんを諦めて了ひます。』
清子は斯う云つて屹と唇を嚙締めた。

『あゝ。氣の毒だけれど然うしておくれ。』
と、直子は發と嘆息した。

偽り多き此うき世に、花枝と云ひ、また清子の如く人を動かす、世を動かす、偉大なる其力は、其人の心の奥底から流出た、止むに止まれぬ眞の誠心でなければな

らないと、直子は然う思つたのである。

『けれど、叔母さん。妾のやうな者がこれ程友衛さんを思つてゐると云ふ事だけは、どうぞお忘れなさいで下さいまし。』と、清子は再び俯むいた。

『お前の身の上は屹度妾が引受けますから、短氣な事をしないやうに、くれぐれも氣を注いで下さいよ。』

『有難うございます。それで妾も安心致しました。不意に勝手なお願ひをいたしましたして、御迷惑をかけたのは何とも申譯が無いのですけれど……。』

『いゝえ。氣の毒がつたり禮を云つたりするのは此方の事です。妾は今日までお前が然う云ふ心とは少しも知りませんでした。』

『いゝえ。』と、清子は淋しく笑つて『那樣事を云つて戴きましては……。』

『眞實さ。お前の其心には感心しました。』

『まあ。』と、清子は微笑む。

「妾も、明日頃お前の處へ行つて其事を談してみませう。」

「どうぞ、お願ひ致します。」と、清子は伏目になつて直子の顔を見て『では、叔母さん。其寫眞を戴かして下さいまし。』

「あゝ。」と、直子は寫眞を差出す。

「諄いやうだが短氣な事をしては成りませんよ。」

「はい。」

清子は何となく自分の末の事まで、知られたやうに思はれたので、思はず頭から水を注げられたやうに悚然とした。しかし、自分の爲を思つて然ばかり心配してくれる叔母の心に對しては、心の奥底から感謝したのであつた。

「叔母さん。其事は怎うぞ御安心下さいまし。妾は何事も叔母さんの仰有つた事には反きませんから。」

「それを聞いて妾も安心しました。」と、直子は嫣然り笑つて、長い煙管を取直す。

直子は今迄清子と、斯様に沁話し合つた事がなかつたのみか、互に顔を合はすのでさへ餘り心良く思つてゐなかつたのだ。

叔母姪と云ふ關係は別として、其性質から云つても經歷から云つても、全然正反對の位置にある二人が、怎うして短時間の中に斯くまで親しく話をするやうになつたのか、それは直子にも清子にも解らなかつた。而してまた直子の方から親しく話込んだのか、清子の方から直子に親しんできたのか、それも互に意識する處は無かつた。けれど、二人は二人の間に横たはつてゐる、叔母姪と云ふ關係に依つて斯くまでに親しく話をするやうに成つたのだと云ふ点だけは、二人共同し思ひであつたしかし、お互に後に成つて、良く氣が落ついた處で考へて見ると、此やうに二人が親しくなつたのに就て、不思議であつたに違ひないのだ。

「叔母さん。明日に少しでも被在いましたら、怎うか阿母さんに然う仰有つて下さいまし。」

たちを取つては赤の他人ではあるし、加之、自分の家に下宿してゐたと云ふ以外には何の關係もない其人に、自分一家の者の身の振方を相談しやうと云ふのは、餘り突飛な得手勝手だと、香代子は有繋に氣も咎め、また耻かしくもあつただけれど然りとて他に頼るべき人も無いので、取敢へず友衛の家へ訪れたのは、清子が立歸つた一時間ばかりも後であつた。

始めて直子に逢つた時は相當に氣兼ねしたが、今に成つては其氣兼ねもなくなり、直子と友衛の前で積る話に時を移す中、後前まじりの身の上話も次第に目下の状況に及んだので、香代子は終に思ひ切つて自分の家の内状を悉く打明けたのであるもとより結果は失望に終ると知りつゝ、彼女は父母の心から自分の心の苦しみまで告げた。而して今までの親しみや、暖さがそれと共に消えて、冷かな苦い失望の味を嘗めねばならぬ一齣の、徐ろに展開される事を豫期したのである。しかし、其後に出た直子と友衛の言が、彼女に取つて意外でもあり、また嬉しくもあつた。直子

と友衛は香代子と其悲しみを同じうしてくれ、加之、香代子に取つては到底望んで得られぬ理解と、同情と、慰藉とを與へてくれたから。

而して、猶此後とも及ばずながら甚麼にでも力になつてやらうと、快く受合つてくれたので、香代子は始めて重荷をおろしたやうな氣がした。

香代子は包み切れぬ嬉しさを顔に現しつゝ、

『桐野さん。それにもう一つお願いがございますけれど……。』

『甚麼事です。』と、香代子は膝の上に兩手をおいて唾を飲み込む。

『妾も斯うして毎日遊んでゐても爲やうが有りませんから、何處かへ勤めに出たいと思ふんですが桐野さん如何でせう。』

『いや。香代子さん。それはお止しなさい。そんな事を成さなくても……。』

『いゝえ。桐野さん。那樣事を仰有らずにどうかお世話を願ひますわ。』

『香代子さん。那樣事を成さらずとも……。』と、直子も横から口を入れる。

■引あはせ

こんな事で種々経緯の有つた後、とうとう香代子の心が届き、左も右も友衛が口を尋ねて見てやると云ふ處で一段落を告げたのである。

『けれど香代子さん。此口を尋ねるにも一二週間はかゝりますよ。』

『かゝつても可ござんすわ。』

『では、一つ尋ねて見ませう。』

『どうぞ、よろしくお願い申します。』

『承知しました。』

香代子は發と安心した。歸つて此事を父母に話したら甚麽に喜ぶだらうと思へば彼女は心の中の嬉しさは禁する事が能なかつた。

四谷見附の電車停留場から、市ヶ谷の方へ折れて十七八間、四ツ角になつてゐる

其左角に、かなり大きな三河屋と云ふ牛肉屋がある。

十五年も前から續いた此邊切つての古店で、加之料理屋風に粹に造つてゐると、場所の可いので客脚はなかく繁く、時には粹な細棹の三味線の音締めも洩れてくる。

其三河屋の奥まつた四疊半の間で、男二人女二人の一組は、ジリ／＼と煮つく牛鍋を突つきながら、思ひ思ひの話をしてゐる。此四人は中澤兼一に關根達次、滋子の兄妹と、今一人は海老原花枝である。

『もう俊一君も来さうな時分ですわね。』と、中澤は肉を一片つまんで頬張る。

『事に依ると先方が留守だつたのぢや無いでせうか。』

『さう。僕も然う思つてゐるんだが……』と、そろ／＼いつものやうに言が粗雑に成つて来た。

『もう、ですかは止めかね?』と、關根は滋子に酌をさせたのを、口の傍へ持つ

て行きながら云ふ。

■引あはせ

『何有。止めたと云ふ譯ぢやないけど、窮屈だからなあ。』

『は、は、は、。窮屈とは恐れ入つたねえ。』

『笑事ぢや無い眞實だ。』と、中澤は今しも所在無さに、冷えた酒の猪口を手にする時、俊一は香代子を伴つて、女中に案内せられてはいつてきた。

『やあ。遅くなりました。』

『御苦勞でした。』と、中澤は香代子の方を見て『香代子さん。此方へおはいりなさい。』

『はい。』と、香代子は襖越しに花枝と滋子の顔を見て呀と驚きの叫びを揚げた。同時に花枝も滋子も仰反らんばかりに驚いたのである。

いつぞや、市ヶ谷の八幡宮に於て、石黒英吉と友衛との間に争鬭の起らうとした場合に仲へはいつた其女……また其時石黒英吉等と一緒にゐた人なので。

香代子は心の中に驚きながら、俊一の後うしろに小さくなつて坐つてゐるのを見て中澤は、

『香代子さん。今晚貴女にお出を願つたのは他の事ぢや無いです……。こゝに在る二人を引合せやうと思つたからです。』と、俊一の方を向いて『此先は俊一さん云つて下さい。』

『承知しました。』と、俊一は香代子の方を向いて『香代子さん。此處にお出なさるのが關根達次さんと仰有るんです。』

と、此處で俊一の口きゝで三人の者を香代子に紹介した。
『然様でございますか。妾が小倉香代子と申します。』と、香代子は忸怩しながら一様の挨拶をした。これに對して達次を始め花枝と滋子は挨拶すると、女は女同士で疾くも幻馴染の如く心おきなく話をしだした。

この容子を早くも見た一座中の氣輕者の中澤は、

■引あはせ

●引あはせ

四百十四

『いよう。是は疾い。一見舊知の如しとは此事だ。』
三人は是を聞いてドツと笑ひ崩れる。

『處で、桐野友衛令夫人花枝さんに一つお酌を願ひませうか。』

『まあ。』と、花枝は美くしい目で中澤を睨みつゝ、銚子を取つて酌をする。

『桐野介夫人に所望します。僕にも一つ。』

と、達次は猪口を勢良く差出すのを、滋子は横合から突然口を入れて

『海老原さん。お止しなさい。』

『おい！ 滋子。』

『はい。』と、滋子は向直る。

『焼くなよ。』

『あら！』

『何でも可い。令夫人一つ願ひます。』

花枝は再び銚子を取つて並々とき、引込まさうとする時、俊一も側らから。

『友衛令夫人、花枝の君に物申す。こゝへもついでに一つ願ひたいですねえ。』

花枝は詮方無しに又ついだ。中澤は少時三人の顔を見てゐたが、

『どうです諸君。揃ひも揃つて美人ばかりぢや無いですか。』

『成程。大正三美人。』と、俊一は合繩を打つ。

『中で滋子が一番見劣がします。』と、達次は猪口の中の酒を飲みながら、滋子を

尻目にかけて、云ふ。

『どうせ然うですよ。』と、滋子は笑ひながら兄の顔を睨む。

『いや。然うちや無いよ。いづれ甲乙のつけやうが無いねえ。』

『中澤さん。いくらおだて、下すつても、其おだてには乗りませんよ。』

『おだてると思つては間違ひも又甚だしいです僕は實際の事を云つてゐるんだ。』

女三人は顔を見合せて笑つた。男三人は何だか分らぬ事を大きな聲で話合つてゐる

●引あはせ

四百十五

●引あはせ

だが、一寸それが途切れると、中澤は突然大きな聲を張上げて、

『霜は軍營に満て秋氣清し……か。』と、吟じ出す。

『おい！ それだけで止めて了つては可かんよ。終りまでやれ。』

『可しきた。數行の過雁月三更、越山併得たり能州の景、遮莫家郷遠征を思ふ。』

『可い聲だなあ。』と、關根は感心する。

『駄目だよ。桐野に琵琶でもやらせたら素敵なものだよ。』

『然うく。一二度聞いた事はあるが可い聲だなあ。』

『今晚は桐野が居ないから面白くないよ。』

是を聞いて花枝は急にうら淋しい顔をした。那樣事とは知らず、此方の男三人は

相變らず大きな聲で談し合つてゐる。

花枝は急に何やら思ひ出したやうに、

忠告

『小倉さん。今晚の事は友衛さんに隠しておいて下さいねえ。妾、都合によつて友衛さんにもう少しの間逢はれない事になつてゐるんですから。』

『え、承知致しました。』と、香代子は言徐かに答へた。

表は朧月夜もいと心地良く、啾々たる電車の響が喧しく聞える。

表通りには自動車自轉車の往來も繁く、時々けたましい自動自轉車の響も聞える。

今して表通りで電車を降りた直子は、地味な色合の日傘を斜に差して、角筈の三等郵便局から右に折れ、其兩側を軒別に見て來たが、茅葺の小さな納屋を見ては京

ないのだから詰りませんよ。』

『然うでも無いでせう。』

『眞實さ。』と、お霜は態と造り笑ひをする。

『何だか。』

二人の話が一寸途切れると、直子は清子の事に就いて、何から云ひ出して可いかと少時考へてゐた。

直子は一昨日の午後、清子が来て自分と石黒との關係を悉く打明け、直子に援助を乞ふたので有つたが、直子も昨日は都合によつてくる事が能ず、今朝良人や友衛の出勤を送り出すと同時に、池島の家へ出向いたのである。

『今日來たのは清の事に就いて來たのですがね。』

『清の……?』と、お霜は意外の目を瞬らざるを得なかつた。

何の爲に清子の身の上に就いて直子が來たのか。考へやうに依つてはどうにも成

る。

お霜はキョトンとした目で直子を見やり、

『清の事と云ふと……?』

『尤も姉さんからも一應の話は聞きましたがあつたがあの石黒と云ふ人の事ですね……。』

『石黒が……?』と、お霜は云ひかけて偕こそと頷いた。

『其人の事で、一寸可厭な事を……耳にしましたから……。』

『可厭な事……?』

『或人からねえ。』

『甚麽事です。』と、お霜は奇異の眼を洵りつゝ、有繋にこればかりは聞捨にならなかつた。

『妾の處へくる中澤と云ふ人の友達に關根と云ふ人が有るんですよ。其人が石黒と云ふ人の素性を良く知つてゐるんでねえ。』

『何か石黒の事に就いて悪い事でも……？』

『まあ悪いと云へば悪いのですが……。あの家は血統が悪い然うですよ。』

『え？』とお霜は驚きの聲を揚げた。

『彼家は肺病の血統を引いてゐるんですとさ……。』

お霜は益驚いたが、有繋にそれとは信へなかつた。

『まさか……。』

『いゝえ。然うなんだ然うですよ。今までのいふん纏りかけた縁も有つただけれど、血統の悪い事を知つて衆破談に成つて了つたんだ然うです。でねえ。其關根と云ふ人が、清はそれを知らずに行こうと思つてゐるんだから、妾に早く忠告してやつたら可いだらうと云つただけれど、妾は、妾のやうな者が那樣事を云つて行つても、到底承知するやうな事は無いからと云ふたんですよ。けれど、其人が餘り五月蠅く云ふものだから、左に右云つて見るだけは云つて見やうと思つ

て來たんです。』

『へえ。』とお霜は餘りの事に二の句が續かなかつた。

『それでね。妾のやうな者の云ふ事は當にならないと云つて了へばそれまで、すが、まあ能る事なら此縁を見合せた方が可からうと妾は思ふんです。』

『だけれど、もう定つて了つたのだから、今更見合すと云ふのも餘り不人情過ぎますし……。』

『しかし、是が式を濟ませて了つたとか云ふんだらまだしも、まだ式も濟ませて無いのだから何と云つても破れますよ。それで清を手許においては都合が悪いと云ふのなら、一時妾の家へ來てゐても濟む事ですから、寧ろ人を立て、斷つて了つた方が、此女の爲にも成るだらうと思ふんですが……。』

『さあ。それが眞實の事なら、今の中に何とか方をつけなければならぬけれど……。』

と、お霜は未だ半信半疑の体で、清子の顔をチラリと見て、

『清、これに就いてお前は何か聞いた事が有るかい？』

清子は今まで二人の話を聞いて、私かに思ひ當る事があるらしかったが、不意に斯う母親に尋ねられたので、少なからず狼狽しながら、

『え、すつと前に……まだ花枝さんたちが此裏に居た時に、一寸悪い噂を聞いたばかりでした。』

『甚麽事だい？』

『花枝さんと石黒と此前一緒に成るやうな話があつたしせう。』

『あゝ。』

『けれど、やはり血統が悪いと云ふ事で纏りかけた縁も纏らずに了つたのです。』

『へえ。けれど、花枝さんの處と石黒とは親類ぢやないか。』

『え、遠縁なんですよ。』

『遠縁……？』

お霜はもう疑がう餘地は無かつた。お霜は直子の云つた事と清子の云つた事を綜合して見れば辻褃の合ない處が無いのみか、悉く符合してゐるので、彼女な失望の目を睜つたのである。

お霜は、友衛に對する復讐手段として、清子を石黒へ遣るのが最善の策だと思つてゐたのが、意外にも石黒の血統が悪いと云ふ事に於て、自分が思つてゐた策略を根本から瓦解されたので、失望と落膽の餘り、頓には何とも云へなかつた。お霜は飽まで友衛に對する復讐手段として、石黒の血統の悪いと云ふ事を知りつゝ、自分の最愛の清子を其犠牲に供するに忍びなかつたのだ。

『前にも然う云ふためしが有るんだから、今の中に斷つて了つたらどうです。』と直子はお霜の大分弱つた容子を見て、此好機會を外すまいと、先ず鋭い矢を切つて放つたのである。

『さあ。那樣に悪い處ならば見合さなくては此女が可哀相だからねえ。』と、お霜も大分弱音を吐き出した。

『然うですとも。』と、直子は大きな感動を其受言に現はす。

『詮方が無いからねえ。』

『然う云ふ可い處なら清に取つては幸福だけれど、ごうも血統が悪くてはねえ。』

『まあ。それでも早く分つて幸福でしたよ。もし是がもう少し遅かつたらそれこそ取返しのかね事に成る處でした。』

『是で妾も云ひ甲斐があると云ふものです。』と、直子は嬉しうに『是で妾も重荷をおろしたやうな氣がしますよ。』

清子は自分が石黒へ行かなくても可いやうになつた喜びよりも、直子が自分の爲に是程心配してくれたのが嬉しかったのだ。

『さあ。然うと定つたら妾はもうお暇致しませう。』

『直さん。まだ可いちやないか。晝の御飯でも食べて悠然りして行きなさいよ。』と、お霜が云ふ傍から清子も

『眞實に叔母さん。お午の御飯でも上つて被在いまし。何も御馳走は有りませんけれど。』

『でも、家は梅一人なんだもの。人にでも尋ねて來られると困るから、お暇しませうよ。』と、清子の方を向き『清。一緒に來ないかい？』

『然うですなえ。』と、母親の方を見て『阿母さん行つて來ても可ござんすか。』

『あゝ。行つておいで。』

『では叔母さん。少しお待ち下さいまし。今仕度をして參りますから。』

清子は斯う云捨て、隣りの室へ行つた。後で直子とお霜は差向ひで、

「家なんかやはり衆出て了うので、出たくても出られないのですよ。」
これを始めにいろ／＼世間話に時を移す折しも、綺麗に仕度をした清子が徐かに
はいつてきた。

「叔母さん。どうもお待たせ致しました。」

「すつかり能上つたねえ。」と、直子は浮腰になつて「姉さん。飛んだお邪魔をし
ました。」

「又、来て下さい。」

「姉さんも来て下さい。」

互ひに諄々しい挨拶をした後、直子と清子は表へ出た。

来る時にはいくらか濕つてゐた地も、歸る時にはカラ／＼に成つて、砂を巻いて
吹きつける風に、二人は日傘を前に傾けたまゝ、云ひ合せたやうにピツタリ寄り添
ふた。

電車通りへ出た時、清子は始めて直子の顔を見つめて、

「叔母さん。いろ／＼お世話になりました。有難う存じます。」

「まあ。早速承知してくれて結構だつたね。」

「妾、阿母さんが承知するかどうかと思つてハラ／＼してゐましたの……。」と、

清子は微かに笑つた。

「妾もすいぶん心配したのだよ。けれど、早速承知してくれたので、甚麼に安心
したか解らないよ。」

「妾も……。」と、清子は笑ひながら「叔母さん。あの石黒は眞實に血統が悪いの
ですか。」

「あゝ。眞實なんだとさ。實は昨日來やうと思つただけけれど、何か石黒の悪い
處を見つけて行かなければ駄目だと思つたのであの中澤と云ふ人と、其友達の關
根つて云ふ人に聞いたのさ、處が恰度都合が可かつたぢや無いか、關根つて云ふ

人が其人の素性を良く知つてゐたのだもの。でねえ。良く聞いたら石黒と云ふ家は衆肺病で死ぬんだつて云ふぢやないか。』

『では、眞實なのですねえ。』と、清子は目を圓くして『妾、阿母さんを承知させる方便かと思つてゐましたわ。』

『いくら方便でもあんな事が云へますか。』と、直子は笑つた。

『でも妾安心しましたわ。阿母さんが直ぐ承知してくれたので。』

二人が斯様事を話合つてゐる時、今しも啾々たる響をなして疾驅してきた新宿行きの電車が、二人の前でピツタリ停車したので、二人は徐かに車上の人となつた。

その夜

長閑なる春の日はトツブリと暮果て、晴れわたつた大空に耀く數限りの無い星の光に、若芽の萌出た樹木の梢に靜かに夜露が降りてきた。其四月四日の夜。

やがて七時にも成らうと云ふ頃、立並ぶ家の屋上より、煌々たる月が、宛ら群羊に臨みし猛虎の如く、淡き光を放つ星の中に清い光を放ちつゝ、儼然として其雄姿を現はした。

そよ吹く風もまだ寒く、見越の柳の糸が靡いて、門の燈の光さへ、木の間がぐれの薄明り。

今夜こそ、友衛の成功を祝ふ日として、數多の人は續々友衛の家へ繰込んで、疾七時と云ふに殆んど座敷は立錐の餘地もないと云ふ有様である。唯、上山俊一と關根達次の二人は、直子が秘密に頼んだ事が有つたので、まだ來てゐないけれど。

其中での主人役は中澤で、來客には池島喜一郎に息子の祥太郎、女としては香代子に滋子の二人、他は悉く友衛の友人である。

それから二十分餘りも経つた後、俊一と達次に伴なはれてきた常正に花枝は、門の戸が啓いてゐるのに怪しみながら中へはいつた。

「關根さん。貴方はお二人と一緒に庭の方へ廻つて下さい。私は叔母さんに然う云つてきますから……。」

「承知しました。」と、達次は二人を顧みて「私と一緒ににお出なさい。」

二人は無言のまゝ、頷いて、關根達次と共に庭の方へ行つたが、花枝は只一人何となくソワ／＼してる、今晚こそ、かねて六年間一日も忘れた事の無い、戀しい友衛に逢はれるのだと思へば。

俊一は一人玄關へ差かゝつたが、格子戸の中に思ひもよらぬ二人の怪しい男を見たので、彼ははつと驚いたが、束々と其方へ進み、二人の首筋をグツと掴んだ。

「あ！」

驚きの聲を揚げる間もなく、強い力に二人はズル／＼と外へ引出された。

「誰だ……。」

聲を掛さま俊一は、右手に掴んだ男の顔を差覗くと共に、呀と驚きの聲を揚げた。「貴様は吉だなあ。」と、左に掴んだ小男の顔を見て「ふうむ。貴様は山川とか云ふ溝鼠だな。」

二人は苦しき息をつきつゝ、逃んと藻掻くのや、シツカリ掴んだ俊一は、

「やい！ 今までは大目に見てゐたが、飽迄桐野に祟りをするのみか、社會に害毒を流す貴様等はどう許しておかぬから覺悟しろ。これから警察に引渡すから然う思つてゐろ。」

藻掻く二人を殆んど宙に、俊一はズル／＼と門の外へ引ずり出した。

戸外でこんな騒ぎが有つたとは露知らず、中では拳を打つ掛聲も勇ましく、折々詩を吟する聲も聞える。

それから二時間餘り後。降るが如き盃の攻撃に辟易した友衛は、漸く多くの人の目を盗み、一人に庭に立出で、闌干たる星の光を仰ぎつ、苦しい息を發と吐いたが、又當も無く徐かに歩を運ぶ時、思ひも寄らぬ後から、徐かに彼の肩に手をかけたものがある。

『友衛さん。』

友衛は呀と驚きつ、忙しく後を振り返り、女の顔を一目見て、

『お、花……花枝……。』

忙して何か云はうとした彼は、激しい息苦しさを感じて、何も云ふ事が能なかつた。

『友衛さん。』と、再び微かに其名を呼んだ時、友衛は漸く心を落つける事が能たが、胸の動悸はます安まらぬ。

『花枝さん。君は何用有つて此處へ來た。いや、誰に斷つて此處へ來たのだ。君

と僕とは六年以前に、既に……既に縁が切れてゐる筈ぢやないか。』

『……。』
『君も野盜の類で無い以上は、無斷では人の家へはいつて來ないだらう。』

『返事の能ない處を見ると、君は無斷ではいつて來たのか……あ、僕は怎うしても然う思はれない。僕が此處へ越してきたのを、君は知つてゐないだらう。』

『……。』

『那樣事は怎うでも可い。花枝さん。君と僕とは互に何の縁故もないのだ。さあ早く歸つて貰はう。』

此時、花枝は偶と顔を揚げた。而して涙の満た目で友衛の顔を見て、

『友衛さん。許して下さいな。あの時は妾が悪かつたですから。』

『君は何を謝罪る。』と、友衛は湧かへる胸を強いて押へ『何も謝罪る事は無いぢ

やないか。あの時は僕は墮落してゐたんだから、君に愛相を盡かされたのは無理は無いさ。僕は自分の身を恨んでゐても、君を少しも恨んでは居ないのだ。」
 「然う云つて下さると妾は却て辛いのです。」と、花枝は汚れた着物の袂で目を押へ「友衛さん。妾、お願ひですから許すと一言仰有つて下さいな。」
 「馬鹿な。」と、友衛は懐舊の涙にくれ「君は何を云つてゐるのだ。」
 「ねえ。友衛さん。許すと一言仰有つて下さいよう。」
 と、云ひつゝ、彼女は友衛の肩に手をかけた。
 「諄い！」と、友衛は身軀を横に捻れば、花枝はもろくもパツタリ地上に打倒れた。

『あ！』

と、思はず聲を立てる友衛の顔を、花枝は下から見揚げて、

『友衛さん。貴方は然う仰有いますけれど、それは口先ばかりなのでせう。眞實

は……。』

『おう。』と、友衛は有繋に絶然として『お前の思つてゐる通り、如何に……如何に墮落したとは云へ、あれほど固い約束をしておきながら……。』

友衛はせきくる涙に胸が塞つて何も云ふ事が能なかつた。

『許して……下さい。』

花枝は堪兼て地上に泣伏した。

「花枝さん……お前は何故泣く。六年前の九月四日。月は變つてゐるが今日の日だ。加之、今晚のやうに清い月が耀いてゐた其晩、僕が日除の原で流した血の涙と、君が今晚流す那樣……那樣安價な涙と棒引にされては此方が堪らない。おい……花枝……僕は六年後の今日に至るまで、片時もあの晩の事は忘れた事は無いぞ。」

恚う云つた友衛の顔には、熱い涙が傳はつた。

『友衛さん。あれには深い譯が有つたのです。……友衛さん。お願いですから其事は聞かないで下さい。此事は中澤さんも俊一さんも御承知なんです。』

『何……？』

『友衛さん。貴方がそれ程妾を恨んで被在るのなら、此處で妾を打つとも蹴るのもして下さい。貴方の……貴方のお腹の癒るやうにして下さい。』

『那樣馬鹿な事が……。』

『い、え。妾は貴方になら、殺……殺されても構はないのです。』

花枝は徐かに立上り、涙に曇る目を拭ひもせず、ピツタリ友衛に寄り添つて、

『ねえ。友衛さん。どうか然うして下さいまし。』

友衛が何か云はうとした時、母屋の方から走つてきた男は別人ならぬ中澤兼一である。

『おい桐野！ 少し待つてくれ。云ふ事がある。』

其聲に驚いて花枝も友衛も共に振り向いた。此時、漸く二人の傍に寄り、忙しき息を發と吐きながら中澤は、

『桐野！ もう花枝さんを許してやつたら怎うだな。』

『しかし、是ばかりは……。』

『君は何事も知らないから然ういふ事を云ふのだが、決して花枝さんは君に愛相を盡したのではないのだ。』

『え！』と、友衛は有聲に驚きの聲を揚げた。

『それは君が墮落した時、君の氣を勵ますため、君の阿母さんに頼まれて、態と愛相づかしをしたのだ。』

『……。』

『なあ桐野。然ういふ譯なんだから。君は花枝さんに感謝をしても、少しも恨むところは無いではないか。』

俯むきながら此中澤の言を聞いてゐた友衛は、先刻花枝が『あれには深い譯があつたのです。』と、云つた言が、自ら讀めてきた。

『然うか。今にして始めて知る。中澤さん。花枝さん。僕が悪かつた。許してくれ給へ。』

『友衛さん。』と、花枝は狂氣の如く叫んだ。

『貴方は妾の心がお分りに成りまして？』

『花枝さん。花咲かぬ身は静かなる柳かな。お前が然ういふ心とは知らなかつた二人は再び六年以前のやうに……。』

『えゝ。』

二人が固く握り合せた手には、再び六年以前の如き熱い血が通じ合つた。中澤は二人の容子を見て、

『桐野、分つたか。』

『中澤さん。貴方にも厚く禮を云ひます。』
『何有。これが親友の義務だ。』
此時、傍らの木蔭から熱い涙に咽びながら、母親の直子と、俊一、常正の三人が出てきた。

『花枝さん。』と、直子は涙を流しつゝ、其傍に寄つてきた。

『阿母さん。』と、花枝も嬉し涙に掻きくれる。

『桐野君。妹の事は頼みます。』と、常正は嬉しさうな顔ながら、其目の中に玉の如き涙が光る。

『あゝ。常正さんですか。』

友衛は恥かしさうに俯むいたが、傍に俊一の立つてゐる姿を見て、

『あゝ、俊一さん。貴方にもいろ／＼お世話に成つた。厚く禮を云ひます。』

『いやに改まつたねえ。』と、俊一は頭を掻きつゝ、『然う禮を云はれると何だか襟

その夜

四百四十四

つたいやうな氣持がするよ。時に友衛君。今晚ねえ。此處へ山川と長谷川が忍び込んだんだよ。」

「え？」と、友衛と花枝は目を睜る。

「今警察へ引渡して来たばかりさ。」

「へえ。」と、友衛は呆れた。

此時、友衛は見るともなしに生垣の方へ目を移した時、生垣の處に思ひも寄らぬ女の立姿を認めたので、彼は束々と其方へ進んだ。

「誰か……。」

聲に驚いて怪しき者は、衝と生垣から五六間離れ、

「友衛さん。」と、微かに聞える清子の聲。

「あ、。」

友衛は傾倒るやうに二三歩其方へ進んだが、其ま、直と足を停めて、涙に満ちた

眼を忙しく瞬いた。

小説かへり咲 (終)

著作
所有

大正五年十一月十五日印刷 ● 大正五年十一月二十日發行

著者 河內 柳葉

發行者 東京市神田區表神保町十番地 井上鐵次郎

發行所 大阪府南區安堂寺橋通四丁目三十九番地 井上尙一

印刷者 大阪府西區新町南通三丁目二十番地 日出版助

發行所

東京市神田區表神保町十番地 井上鐵次郎
大阪府南區安堂寺橋通四丁目三十九番地 井上尙一
大阪府南區安堂寺橋通四丁目三十九番地 井上尙一

書堂書店
書堂分店

定價 五錢 郵稅 六錢



282
286

終

